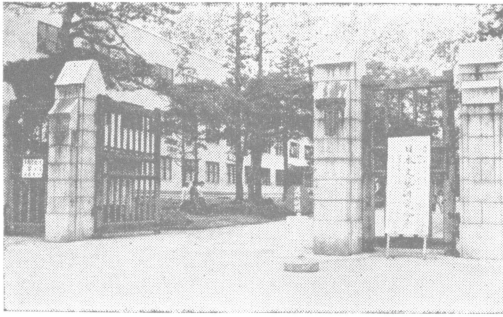


地方だより

×…東北大学地球物理学教室…×



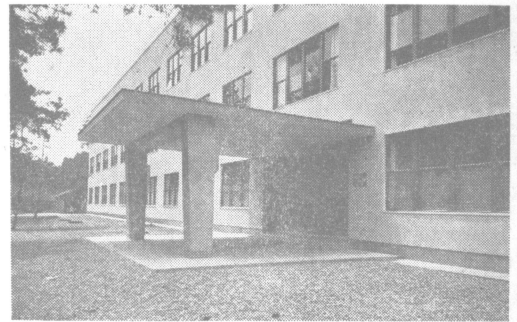
東北大学正門左の建物が理学部新館

一般的に言って大学のある場所はその周囲に本屋、喫茶店、下宿屋其他があつて、いわゆる大学街の中心にあつて落ち着いた学問的雰囲気をかもし出しているのが多い。東北大学もその例外ではないが、唯多くの他の大学と異なるのは盛場が比較的近くにあつて何かと便利なことである。仙台の一番の盛場である東一番丁まで歩いて5分でゆっくりと行かれるという恵まれた環境にあり、毎日の昼休みともなれば職員、学生共にこの地の利を十二分に活用することが多い。一方仙台の街は小さいために割合静かで戦前は今頃は大学の中でも聞かれたものであつたが、残念ながら空襲にあつてからは鳥の声はスズメや土鳩位なものでさびしい極みである。それでも10分も歩くと広瀬川のほとり、小さな林の中と都塵を離れた感じがするのはいささか気がする。さてその東北大学も空襲にあつてからは建物其他の施設の点でずい分不自由な眼にあつた。やつと今年あたりからは外からみて戦前の水準に達した位で、内部の設備にまでは未だに手が廻り切れない。理学部はこのよい例で戦時中約半分が焼失してここ10年の間借家、間借りの生活をして、今年やっと戦前の建坪近くまで復興した所である。理学部の改築された建物は三階建鉄筋コンクリート、延面積1500坪の堂々たるもので、とにかく間借りから独立住宅に移つてホッと一息ついた所である。

地球物理学教室は東北大学が出来た頃から物理教室の一講座として開設され、昭和19年に独立して一教室となったものである。現在はその古くからあつた焼失をまぬかれた研究室と理学部の新館の一部とに分れている。二つに分れているのは不自由だが昨年までは3カ所あるいは4カ所に分散していたから少しは便利になつたわけである。

イントロダクションが長過ぎたが、いよいよ気象研究室に移ろう。地球物理学教室の一講座だけであるから定員は、教授1、助教授1、助手2、其他2、大学院学生若干名といった構成である。戦後10年間に設備をととのえたのであるから思うように充実せず、一般的な気象器械は自慢できるものはない。唯この教室は赤外線輻射の研究に特色があつて最近に地球物理観測年に輻射の観測を行うことに定まつてからは、この方面だけは恥かしくない設備にしようと計画し、実行に移し始めた所であ

る。その専門の観測小屋も近い内に完成の見込みで、ここで定時観測は勿論通常では観測できにくい種々の現象も観測して大学の研究機関としての使命を果そうと考えている。唯わずかの費用で何とか物にしようという「日本的」な考えにたっているものだから、その方面の研究



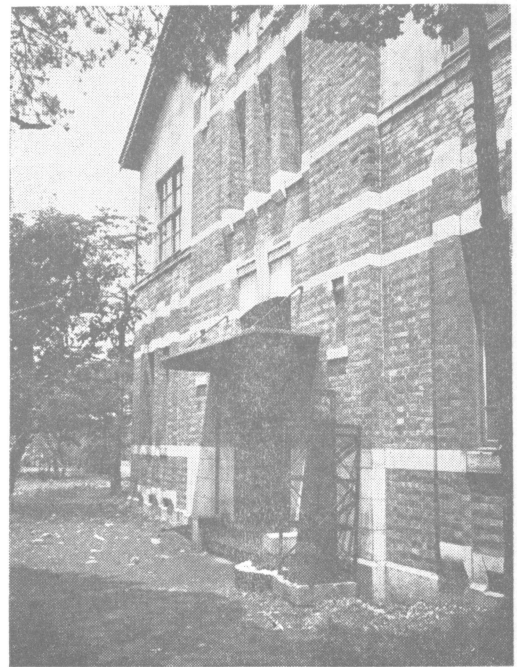
理学部新館 玄関附近

(2階の左側に地球物理教室の研究室があります)

者は設備をそろえるのにかなり忙しそうにしている。

この気象研究室は前にものべたように輻射に特色があり研究者は理論方面、実験方面合せて4名もいる。日射の方に、あるいは夜間輻射、物性論的研究にと広く輻射全般にわたつて研究している。次に雲物理の研究は研究者3名で実験的研究が主で、室内実験が主であるが時には真冬山に行つたり、船で太平洋に行つたり、飛行機を利用したりして研究している。唯気象学の一大部門の気象力学は研究者が只一人だけしかいないのは淋しい気がするがそのうちに充実するでしょう。

1956年6月 大西外史記



地球物理学研究室 旧館

(大学院学生の研究室になっています)